ACTFL-OPI トレーナー
嶋田 和子
kazushimada@acras.jp

ＯＰＩを知って、授業に生かそう

１．ＯＰＩ理論を知る

２．ＯＰＩを聞いて、判定してみる

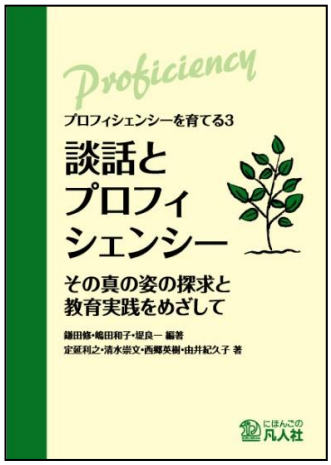
３．ＯＰＩの考え方を実践に生かす

◆ＯＰＩの＜Ｐ＞って、何だろう？

◆なぜ今、ＯＰＩが注目を集めてきているのか？

◆ＯＰＩが、どうして実践に生きるのだろうか？

【ＯＰＩとプロフィシェンシー関連の参考書】



ACTFL-OPI トレーナー
嶋田 和子
kazushimada@acras.jp

0．イントロとして

【ＯＰＩとは？】

ACTFL（全米外国語教育協会：The American Council on the Teaching of Foreign Languages）で開発された汎言語的な会話試験（OPI=Oral Proficiency Interview）

【OPIの特徴】

① 口頭能力を測定するための１対１のインタビュー試験

② 時間は最長 30 分

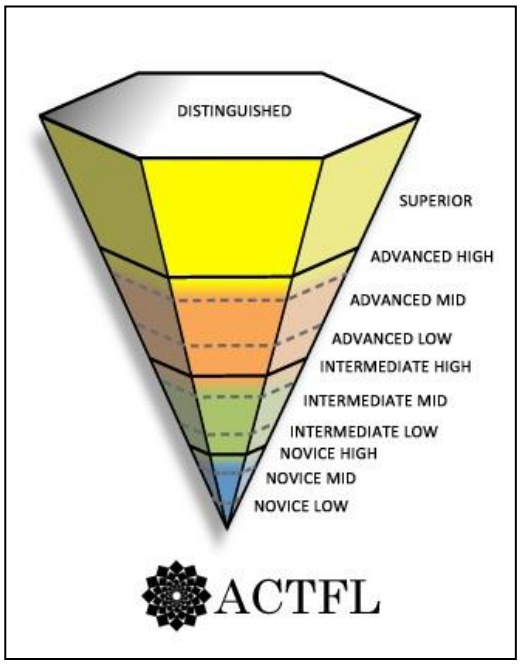
③ 4 つの評価基準を持つ「総合的な評価法」
機能・総合的タスク、場面・内容、正確さ・理解難易度、テキストタイプ

④ 10 段階による判定

⑤ 標準化された構成
「導入部→反復過程（レベルチェック、突き上げ）→ロールプレイ→終結部」

⑥ 相互のやり取りのある学習者中心の評価
→1 つ１つＯＰＩの内容は異なる

超級	
上級	上級ー上
	上級ー中
	上級ー下
中級	中級ー上
	中級ー中
	中級ー下
初級	初級ー上
	初級ー中
	初級ー下



※「ACTFL 言語運用能力基準 2012 年版―スピーキング」には【卓越級】(Distinguished)が出ていますが、OPI 判定では使いません。

３．正確さ・理解の難易度
（前略）……すべてのレベルにおいて、正確さには、語彙・文法・発音・流暢さ、語用論的能力、社会言語学的能力が含まれる。
各レベルにおける正確さの要件は、以下の表に、どの程度理解されるか、受入れられるかで要約されている。(P.17-18)

判定基準―スピーキング　（新マニュアル、p.19）

プロフィシェンシーレベル	機能・総合的タスク	場面・内容	正確さ・理解難易度	テキストタイプ
超級	身近な話題、不慣れな話題について話し、意見を弁護し、仮説を打ち立てる	ほとんどのインフォーマル、フォーマルな場面／一般の関心事に関連した話題と特定の興味や知識に関する分野の話題といった幅広い範囲	基本文法に間違いのパターンがない。間違いがあっても、聞き手は、メッセージから注意をそらされるなどコミュニケーションに支障をきたすことはない	複段落
上級	主要時制枠において、ナレーションと描写ができ、不足の事態をはらんだ日常的な状況や取引に効果的に対応できる	ほとんどのインフォーマルな場面とフォーマルな場面の一部／個人に関連した、または一般的な話題	非母語話者に不慣れな話し相手でも間違いなく理解してもらえる	口頭段落・つながりのある談話
中級	言語を使って自分の伝えたいことを作り出す、簡単な質問をすることができる、単純な場面や取引状況に対応できる	いくつかのインフォーマルな場面と限られた数の取引の場面／予測可能な、日常生活や個人の生活環境に関連した話題	非母語話者になれた話し相手に、時に繰り返したりすることはあるが、理解してもらえる。	ばらばらな文・つながった文
初級	決まった語句や暗記した発話で、必要最小限のコミュニケーションができる。単語、語句、リストなどを産出する	もっとも頻繁に起こるインフォーマルな場面／日常生活のもっともありふれた内容	非母語話者に慣れた話し相手にも、しばしば理解するのが困難な場合がある。	個々の単語、語句、リスト（列挙）

ACTFL-OPI 試験官養成マニュアル（2012）日本語版(2015) より

ACTFL-OPI トレーナー
嶋田 和子
kazushimada@acras.jp

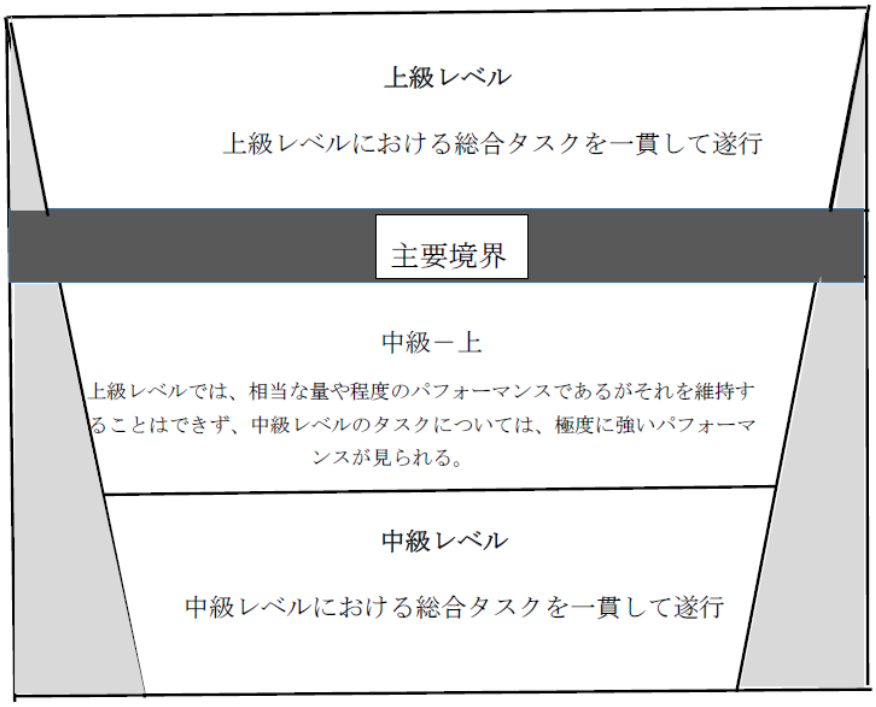
表 1　【Table 1】　（新マニュアル、p.10）

	総合タスクの階層的配列
超級レベル話者の特徴	・一般の関心を集めている話題から専門的・学術的な話題について、フォーマル・インフォーマルな状況での会話に、充分に、かつ効果的に参加できる ・複段落を使って、うまく構成された議論を展開して、意見を説明したり弁護したり、効果的に仮説を打ちたてることができる ・与えられた話題について具体的にも抽象的にも話すことができる ・言語的に不慣れな話題や場面設定をこなすことができる ・非常に高度な言語的正確さを維持することができる（パターン化した誤りはない） ・専門的・学術的な環境において必要な言語的要求を満たすことができる
上級レベル話者の特徴	・個人的な、または、具体的な一般の関心事について、ほとんどのインフォーマルな場面といくつかのフォーマルな場面で会話に積極的に参加できる ・アスペクトのコントロールをより示しつつ、主な時制の枠組みでナレーションと描写ができる ・さまざまなコミュニケーションの方策を使いながら予期していなかった複雑な状況に対応できる ・適切な正確さと自信を見せながら、段落の長さの結束した談話でのコミュニケーションを維持できる ・仕事や学校生活を送るために要求される言語能力を満たすことができる
中級レベル話者の特徴	・日常生活の活動や個人的な状況に関する予測できるような話題についての簡単で明解な会話に参加することができる ・質問をしたり、質問に答えたりして、情報を得たり提供したりすることができる ・受け身がちではあるが、基本的な複雑でないやりとりを開始し、維持し、そして終了させることができる ・言語要素を組み合わせることによって、ばらばらの文、あるいは、連なった文にしながら、同情的な聞き手に、言語を使って、言いたいことを作り出し、自分なりのメッセージを伝えることができる ・目標言語文化圏で生活するために最低限必要な、個人的・社会的なごく単純なニーズを満たすことができる
初級レベル話者の特徴	・日々の生活で最もありふれたごく簡単な質問に答えることができる ・個別の単語、単語のリスト、暗記した表現を使ったり、時に自分で単語や語句を組み合わせたりして、外国人や学習者の発話に慣れた聞き手に最小限の意味を伝えることができる ・限られた数の身近な必要を満たすことができる

ACTFL-OPI 試験官養成マニュアル（2012）日本語版(2015) より

ACTFL-OPI トレーナー
嶋田 和子
kazushimada@acras.jp

閾と主要境界の例と説明



『マニュアル(2012)』p.11

「－上」は、一つ上の主要レベルからの転落を示すもので、判定の土台となっている主要レベルでの最高に素晴らしいできを指すものではない。
サブレベル「－中」の話者は、一つ上の主要レベルの言語的特徴のいくつかを提示したり、さらには、それら言語的特徴においてコントロールさえ見せる場合もある。
「－下」の話者は、主にそのレベル内で機能することができるが、一つ上の主要レベルで機能する能力はほとんどない。
（ACTFL-OPI 試験官養成マニュアル(2012)　日本語版(2015) pp.11-12 より）

【参考】

■教師の役割とテクニック　（「OPI マニュアル(1999)」p. 121
→「新マニュアル(2012)」日本語版には第８章がありません）

インタビューでは、試験官ではなく、インタビューを受けている被験者の方が会話のほとんどを受け持っているという事実は、教室活動を考える上で重要な教訓となる。学習者が言語運用能力を向上させたいのであれば、教師が取るべき役割は、自分自身を「舞台に上がった賢人」に見立てるような伝統的なものではなく、むしろ、**「側に付き添う案内人」**というようなものになるはずである。すなわち、**教師側からの話を最小限に抑え、学習者が会話に参加する機会を最大限に増やす**という役割である。

ACTFL-OPI トレーナー
嶋田 和子
kazushimada@acras.jp

２．ＯＰＩを聞いて判定してみよう！

メモ：

３．ＯＰＩの教育実践への応用

■ＯＰＩ活用の可能性（『目指せ、日本語教師力アップ―ＯＰＩでいきいき授業』より）

１．試験を開発する力を養うことができる

２．教材を開発する力を養うことができる

３．教師力アップを図ることができる

１）評価する力―学習者の力を総合的に評価

２）タテ軸で考える―全体の中の位置確認

３）突き上げ力―「ｉ＋１」でギアチェンジ

４）質問力―学習者の発話を引き出す質問の仕方

５）傾聴と共感―ＯＰＩで学ぶカウンセリング・マインド

６）自己教育力―内省から生まれる実践力